

ツィンツェンドルフ自画像

伊藤, 利男

<https://doi.org/10.15017/2332715>

出版情報 : 文學研究. 74, pp.147-162, 1977-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ツインツェンドルフ自画像

伊藤 利 男

年 譜

- 一七〇〇 Nicolaus Ludwig Graf und Herr von Zinzendorf und Pottendorf (以下、Z. と略す)五月二十
六日ドレスデンに生れる。父 Georg Ludwig が病死し、母 Charlotte Justine, geb. Freiin von
Gersdorf は、Z. をともない実家へ帰る。
- 一七〇四 母が再婚してベルリンへ去り、Z. の養育は祖母にゆだねられる。
- 一七一〇 ハレの孤児学院に入学。
- 一七一六 ウィテンベルク大学に入学。
- 一七一九―二〇 教養旅行、ユトレヒト、パリ等に滞在。
- 一七二一 ドレスデンの選帝侯宮廷に仕官。
- 一七二二 **Kontesse Erdmuthé Dorothea von Reuss** と結婚。メーレン同胞教団の亡命者を初めてヘルンフ
ートに入植させる。
- 一七二五―二六 “*Der Teutsche Sokrates*” を書く。

ツインツェンドルフ自画像(伊藤)

- 一七二七 ドレスデンの宮廷を辞職し、ヘルンフートに転居。
- 一七三一〇 ヘルンフート同胞教団に対して異端の風評がおこる。ドレスデン政府、Z・に政治的圧迫を加えはじめる。同胞教団の国外・海外布教活動が始まる。
- 一七三四 Z・シュトラルズント僧団試問委員会より正統信仰証明を得る。テュービンゲンにて僧籍を得る。
- 一七三七 Z・教団主力とともにウエテラウ（ヘッセン）へ亡命。
- 一七三八―九 カリブ海上の聖トマス島に滞在。
- 一七四一―三 北米大陸に滞在。
- 一七四五 匿名でヘルンフートへ旅行。
- 一七四六 „*Naturrelle Reflexiones*“ 発表。
- 一七五五 Z・ヘルンフートに帰還。
- 一七五六 六月、妻が死去。
- 一七五七 六月、Anna Nitschmann と再婚。
- 一七六〇 五月九日、Z・ヘルンフートにて死す。

右の年譜はツインツェンドルフの多彩な生涯の履歴を圧縮して簡条書きしたもので、収録さるべくして省略せざるをえなかった項目が少なくない。たとえば家族関係では、十二人のたいていは幼くして死んだ子供たち——そのなかでヘルンフート同胞教団の歴史に特別な光彩を与えた次男クリスチャン・レナートゥス Christian Renatus (1727—1752) の名前を逸することはできない——に関する事項はすべて省いた。またツインツェンドルフが出会った多数の人々の名前も、彼の支持者であれ敵対者であれ、すべて割愛せざるをえなかった。さらにまた、彼の人生は内外の旅に

明けくれば生涯であったが、ここでは、青年時代の教養旅行と壮年期の二度のアメリカ旅行を記録するにとどめた。著作についても、自伝的記録を含む二点のみを挙げて、神学論文・説教集や、さらには讚美歌集については、いっさい言及を避けた。

周知のごとくツィンツェンドルフの名前は、ヘルンフト同胞教団の活動と結びついて、十八世紀ドイツ精神史の重要な一節を形づくっているが、その関連から見て、彼の生涯を決定したとも言える出来事は、一七二二年メーレン同胞教団の亡命者たちと初めて出会ったことである。当時ハプスブルグ家の支配下にあったメーレンやベーメンでは、フス Johannes Huss (1369?—1415) の宗教改革運動の流れをくむ、かくれプロテスタントたる同胞教団に対して、圧倒的多数をしめるカトリックの側からさまざまな迫害が加えられたため、ドイツのプロテスタント地域へ脱出をはかる信徒が多かったが、ドイツの諸侯国はウィーンに対する政治的顧慮から彼らの亡命を認めることを欲しなかった。たまたま、メーレン出身の大工クリスチャン・ダヴィト Christian David (1690—1751) から彼らの窮状を聞き知った若きツィンツェンドルフは、ふかく同情して、領内に逃亡者たちをかくまってくれるようにというダヴィトの願いを拒否することができなかった。一七二二年十二月二十二日夕、任地ドレスデンから新妻をともなって帰省の馬車を走らせていたツィンツェンドルフは、自領内のフートベルクのふもとの森の中に一軒の小屋の灯を認めて、馬車を停めて訊ねると、それはメーレン同胞教団の信者たちであった。彼は初めて出会ったこれらの亡命者たちに、神の誠実を信ずるようにと励まし、ともに神に祈りをささげた。この出会いが、やがてドイツ内外にその存在を知られることになるヘルンフト同胞教団のそもその始まりであり、この時以後ツィンツェンドルフの生涯はそのまま同胞教団の歴史と重なりあうのである。

ヘルンフトの人口は次第に増加して、ツィンツェンドルフが官を辞した一七二七年には早くも三百人を数え、その半数はメーレン人であり、あとの半数はドイツ各地から集まってきた教会離脱主義者や流浪者、変人奇人のたぐい

であったという。こうした人間集団に秩序を与え、自立的生活を可能にしてやることは、なみ大抵の苦勞ではない。ツィンツェンドルフは、まず宗教的寛容と良心の自由の二大原則をかかげるとともに、村の規則を制定して人々にこれに服従することを義務づけた。元來、メーレン同胞教団は一種の自治的な共同生活のうえに信仰をきづいてきたのであって、この生活形式はある程度までヘルンフートにおいても繼承されたが、しかし村民の大多数はもともと農民、牧民、手職人、人足等の素朴な人々であり、教養高い貴族ツィンツェンドルフの目から見れば、彼らの生活習慣には無知と因襲に支配された部分が少なくなかった。そこで窓を開けて部屋の空気を入れ換えるとか、窓から路上へごみ汚物を投げ捨てないとか、火の用心とかいうような、初歩的な生活規則からまず教えこまねばならなかった。このような改革は生活の全般にわたって進められていったが、そのなかで注目すべきもののひとつが男女の同權化である。教団ないし村の集會において成人の男女は平等の發言權と決定權を与えられ、家庭内では妻は夫に隸屬することをやめて対等の伴侶となったが、こうした女權尊重は民主主義に由来するものではなくて、貴族社会のならわしを模範としていることは明白である。

この新しい共同体の出現はやがてドイツ国中に評判を呼んで、知識人や学生で教団に参加する者も次第に多くなり、人々はそれぞれの分に應じて農耕、牧畜、手工業の各分野で勤勞に励み、その結果、教団は經濟的にも自立し繁榮に向かったのである。

以上述べたのは、ヘルンフート同胞教団成立の概略であるが、この成立過程には他の敬虔主義諸派の成立事情と質的に異なる点が見られる。たとえばハレ派の場合、その成立は創始者フランケ August Hermann Francke (1663—1727) の宗教理念の發展の必然的帰結であって、彼の主張に共感する人々が集まって一つの社会的実践団体を結成したのであり、創始者と協力者との間は、最初から共通の志向によって不可分に結ばれていた。これに比べてヘルンフート派の場合、すでに述べた事實關係から明らかなように、ツィンツェンドルフと同胞教団の結びつきは出會いによ

つてもたらされた。もし彼がメーレン同胞教団の亡命者たちと出会わなかったならば、ヘルンフト派敬虔主義は成り立たなかったであろうし、またツィンツェンドルフ自身の生涯も別の道を辿ったにちがいない。しかし事實は、まさに神の摂理によって両者は出会ったのである。そして、その出会いが単なる出会いのまま終ることなく、新しいヘルンフト同胞教団へと発展していったのは、何よりもまずツィンツェンドルフなる卓越した個性に負うといわなくてはならない。

ツィンツェンドルフが初めてダヴィトと会ったとき、彼がメーレン同胞教団の信条や生活慣習についてどの程度の知識をもっていたか、疑わしいが、それにもかかわらず彼が彼らの亡命を受け入れたのは、単なる同情心からではなくて、リッチュルルの言うように、救世主のためにあらゆる宗派の違いを乗り越えてすべてのキリスト教徒を同胞として融和させようとする万人同胞主義的な (philadelphisch) 志向が心底に働いたからであろう。こうした志向を無視しては、彼がヘルンフトに教会離脱主義者までを受け入れた動機は理解できないのである。この万人同胞主義こそは、ツィンツェンドルフが少年時代からの宗教的思想の遍歴を通じて身につけた宗教理念の根幹をなすものであるが、しかしその形成過程は、彼が幼時から受けてきた敬虔主義的な宗教教育からだけでは説明できない。より根源的に、彼の人となりそのものに照らしあわせて考察して初めてそれが明らかになる。

「人生の最初の三年ないし四年のうちに印象は固定し、外界にたいする反応方式がつけられるものであって、これらの印象と反応方式はそれ以後の経験によってもはやその意味を奪われることがない⁽⁸⁾」と述べるのは、一九一〇年『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出』*Eine Kindheits Erinnerung des Leonardo da Vinci* を分析した精神分析学者フロイトである。このフロイトの言葉が人格形成の秘密のすべてを言いあてているかどうかの問題はしばらく措くとして、ツィンツェンドルフの場合も、彼が人生の最幼少期に体験した事柄が決定的な意味をもつのではないかと仮定してみる必要があるように思われるし、事実またすでに一八八〇年代にリッチュルは彼自身の

神学の立場から、ツインツェンドルフの幼年期を考察している⁽³⁾。

ツインツェンドルフが人生の最初に遭遇した大事件は父の病死であるが、生後わずか六週間だった彼が、そのとき何かの印象を受けたとは考えられない。実家へ戻った母は四年後に再婚してベルリンへ去り、幼い息子の養育は母方の祖母の手にゆだねられた。問題はここから始まる。祖母 *Henriette Katharina Freifrau von Gersdorf* (1648—1726) はドイツ敬虔主義の父シユペーナ *Philipp Jacob Spener* (1635—1705) と親交をもつ信心深い女性であると同時に、ひときわ身分高い貴族の出身でもあった。

こうした祖母の膝下にあつてツインツェンドルフが敬虔な宗教感情と貴族としての階級感情とを身につけたであろうことは、容易に想像されるところである。ただし彼の敬虔 (*Frömmigkeit*) は、リッチェルの指摘するところによれば、「兄弟としてのイエスへの愛、すなわちカトリック的な敬虔 (*Devotion*)」⁽⁴⁾ の情調を帯びているが、これはツインツェンドルフとともに朝な夕なに祈ることを日課としていた母方の叔母の影響であるという。リッチェルはツインツェンドルフの宗教性ないし宗教生活のなかに、その他にもいくつかのカトリック的要素を指摘しているが、それらは彼の万人同胞主義と無関係ではありえないと考えられる。ただしその点について神学的に論評する資格は非キリスト教徒たる筆者にはない。

むしろ筆者のより強い関心を惹くのは、幼いツインツェンドルフのもうひとつの特性、貴族としての階級感情、すなわち高慢である。おのれの高慢についてツインツェンドルフが祖母の家に行った九年間に自覚したことはなかったと見てよい。自覚がないからこそ高慢はますます昂るのである。彼が自己の高慢をはじめて意識するのは、十歳になって、フランケが創設したハレの孤児学校に入学した日である。この日のことをツインツェンドルフは二十八歳のとき (*ツインマーマン Joh. Liborius Zimmermann* にあつた一七二八年五月二十九日の手紙のなかで) 次のように回想している。「私が到着した最初の日に、ある貴いお方 (筆者註・ツインツェンドルフの母) が私の目の前でフランケ

先生に、この子を持ちあげないでいただきたい、なぜなら、この子は高慢になって、何か大きなことを企てるくせがあり、自分の才能は大したものだと自惚れていますから、と話されました。この瞬間から私は、ひとが私をこんなにもきびしく抑えつけようとするからには、私は何か特別な人間であるにちがいない、という想念とたたかわねばなりませんでした⁽⁵⁾」

「自分は何か特別な人間であるにちがいない」という想念、すなわち高慢とのたたかい、これは、彼が、おのれの高慢を指摘されたその瞬間、反射的におのれの人生に課した課題であったと見ることができよう。のちの同胞教団の経営というような事業活動が彼の人生の外面的な課題であるとすれば、この高慢とのたたかいは内面の課題である。問題は彼がこのたたかいをどのようにたたかったか、たたかひの結果、高慢を克服できたかである。

十歳のツィンツェンドルフを孤児学校へ入学させたことが教育上正しい選択であったかどうか、論議の余地あるところだが、ツィンツェンドルフはこの寄宿学校で機会あるごとに人々の「ひどい仕打ち」に自尊心を傷つけられた。彼はさきほどのツィンマーマンあての手紙の中で、そういう「ひどい仕打ち」を簡条書きにして述べているが、その第一は、初め上級クラスに編入されることを望んで「最初の公けの試験のとき、自作の祈禱文を提出してそれを暗誦することを申しでたにもかかわらず、先生たちは私を三年級（筆者註・下級のクラス）に編入しました⁽⁶⁾」というところであり、第二は、しばしば不当な処罰を受けたことで、彼は次のように書いている。「先生たちはしばしば些細なことで私を人前や公けの教室で懲戒し、ろばの耳を私の頭に結えつけて路上に立たせたり、また勝手に私を侮辱した他の生徒たちを私が訴えると（彼らは、たとえば私が足で歩くことにまったく慣れていないので、私をあちらこちらへ突きとばしたり、川の中へ投げこんだりしました。「中畧」）、先生たちは訴えられた者たちの言分を信じて、私を虚偽の訴えのかどで、というものも彼らはいっそう大胆に否認したからです、さらに処罰したのです⁽⁷⁾」

次に、親もとから派遣されてきている家庭教師から加えられた「ひどい仕打ち」のかずかずが詳細に述べられて

いるが、こうしたもろもろの「仕打ち」をツィンツェンドルフはどのように受けとめたか、彼自身は次のように述べる。「そのひどい仕打ちは、（中略）もしも私の救世主の誠実が、次の二つのことを私の身に加えてくださらなかつたならば、私の心を完全に混乱させてしまったことでしょう。救世主はまず第一に、私が自分の心を支配して、こうした仕打ちを全部無視してしまうこと、そして十二歳のときらばの耳を結えつけられて人前に立った私の姿を見て、ある人が私に話しかけてきたのに対して私が口にした『コノ屈辱モワレヲ打チヒシゲニアラズ、ワレヲ勇氣ヅケルナリ』（筆者註・原文ラテン語）という言葉を実行に移すことを、私に学ばせてくださり、第二には、心のうちなるあらゆる苦しみを身体の重い病氣の中へ消散させてくださったのです（後略）⁽⁸⁾」

屈辱を転じて勇氣と化す反撥心は、現代的な視点からすれば、人間の積極的な自己救済の手段であり、一方、病氣は精神身体医学が説くように、消極的な自己防衛の手段である。こういう二つの人間的な自助手段を神の誠実からのたまわりもの、つまり恩寵とみるところに、ツィンツェンドルフの敬虔主義的なものの見方を認めることができよう。しかしその反面で、彼には自分がなぜそのような「ひどい仕打ち」を受けざるをえなかったかという点の反省がない。学校当局が彼を上級クラスに編入しなかったのは、恐らく彼を増長させないようにという配慮からであっただろう。また彼が他の少年たちから侮辱され、いじめられたのも、彼が大貴族の子息として受けた、二部屋続きの個室をあてがわれ、家庭教師と召使が侍ることを許されるというような、特別待遇が他の少年たちの妬みを買ったということも当然想像されるが、彼はその点を洞察していない。そしてこの洞察がない限りは、人間対人間の関係でおのれに加えられるいかなる刺戟も、おのれの高慢をくじくよすがになりえない。もし高慢がくじかれる機会があるとすれば、それは別の関係から訪れたが、それは彼の言葉を借りれば「賢明なる監督者⁽⁹⁾」、すなわち神の摂理によるものであった。事情はこうである。パイロイト辺境伯、ハレ大学代表者その他の来賓の前で、自作の三百行から成る祈

禱文をそらで朗誦することになったツィンツェンドルフは、自分のすぐれた記憶力に自惚れて、それを十分におぼえていなかったために、二百九十何行目かまでよみ進んだところで、言葉を見失なってしまうた。「心情の力によって」彼は何とか再び最後の数行を思い出したものの、彼の良心はふかい打撃をこうむった。彼は言う、「主は私の功名心にうち消しがたい衝撃を与え給い、ために、私はこの瞬間から救世主のおん前に平身低頭し、俗世の称揚を常に、また全面的に恐れたのです⁽⁴⁰⁾」

ツィンツェンドルフは、この祈禱文暗誦の一件以来、高慢な功名心を捨てて、その後も事あるごとにきびしい試練によって高慢から守られてきたと告白するのであるが、幼い日々には彼の心に根をおろした自尊心が、はたしてこの程度の失敗の体験によって簡単に拭いさられたのであろうか。その点、彼のその後の行動を見守る必要がある。

さて、十六歳になったツィンツェンドルフは、法律学を学ぶべくウイテンベルク大学に入学する。ウイテンベルク大学の神学部は当時ルター主義正統派の本山として聞こえていたが、この大学が選ばれたのは後見人である敬虔主義嫌いの父方の伯父の意向によるものであった。ツィンツェンドルフは、最初ウイテンベルクを敬虔主義に転向させようと考えて、同地の神学者たちに論争を挑んだが、むしろ正統派の神学者たちが彼が頭に描いていたほどには頑迷な正統主義者でないことを発見して、彼の考えは正統派と敬虔主義との間を調停して両者を和解させようという試みへ発展していった。彼は実際に調停工作にのり出したが、しかしまもなくベルリンから駆けつけた母親の命令によってそれは中止された。彼の意図が万人同胞主義、ないしは、あらゆる教会を一体化しようとする志向から生じたことは明らかである。

やがて十九歳になったツィンツェンドルフは、オランダに向けて教養旅行に出発する。「ウイテンベルクの理論とハレの実践を携えて⁽⁴¹⁾」ユトレヒトへやってきた彼が接したのは、カルヴァン派の信者たちであり、違った種類の哲学であった。彼は彼らの意見に耳を傾けながらも、自らの宗教に忠実であろうとした。次の滞在地パリでの経験

は、相手がカトリック教徒にかわっただけで、オランダと同じように始まった。当時有名なノウィユ枢機卿 Louis-Antoine de Noailles (1651—1729) と宗派の違いを超えて親交を結んだことは、ツィンツェンドルフにとって大きな収穫であった。一年半ぶりに帰国して祖母のもとに帰ったツィンツェンドルフは、家族の希望に従ってドレスデンの宮廷に仕えたが、彼の関心は政務よりもむしろ宗教にあり、敬虔主義の先人たちの例にならって私的集会を開く等の宗教活動に励むうち、やがてメーレン同胞教団との出会いの日を迎えたのである。

ツィンツェンドルフは後年おりにふれてこの青年時代の歩みを回想している。すでにあげたツィンマーマン宛ての手紙もその一つであり、それ以前にも『ドイツのソクラテス』*Der Deutsche Sokrates* の中で一章 (XXI. Discurs) を割いて、自己の内面的発展の過程を叙述している。しかしこの二つの断片的自叙伝がまだ二十歳代に書かれたのに対して、一七四六年に発表された『ありのままの省察』*HEP I EARTOR. Das ist : Naturuelle Reflexiones über allerhand Materien,nach der Art, wie Er bey sich selbst zu denken gewohnt ist* は、すでに人生のなかばを越えたツィンツェンドルフが、自己の人生をどのように把握していたかを示すものとして、注目にあたいる。

同胞教団の歴史にいわゆる「ふるいわけ時代」(Sichtungszeit 1740—50) のさなか、当時ツィンツェンドルフに向けられていた教団内外からのさまざまな非難中傷にこたえて書かれたのがこの『ありのままの省察』であって、この中に彼自身の生涯の回想が含まれているのである。ツィンツェンドルフに対する非難というのは、『省察』の前置き部分から推測して、彼が理論においては無神論者、実践においては狂信者である、ということに要約することができる。少なくとも彼自身は、そのように受けとめていたようである。そして、その非難に対して、自分は実践的な哲学者である、と主張しようとするのである。彼は、そういう主張を友人たちに理解してもらうためには、まず己れが謙遜でなければならぬと考える。そこで、彼の自伝的回想のテーマは、自分がどのように謙遜な人間であるか、あるいは、自分ほどのようにして謙遜になったか、という点にしばられる。

『省察』の伝記部分は、「私はまず、私がいちばん理解されていない問題について、私の心からなる考えを、できる限り述べてみたいと思います。私は謙遜の問題がそれらの諸問題のなかで、まだいちばん解決されていない問題と考えます⁽⁴⁾」という言葉で始まって、すぐさまハレの寄宿学校時代に移り、当時自分はいへん論争好きであったと述べる。そして、実践的能力がまだ発達する機会を得なかった間は、自分の好みは現在よりもわなかったと言うが、しかしこの時代、すでに述べたように、あの祈禱文暗誦に失敗して高慢の鼻をくじかれ、神の前で平身低頭した云々の件については、いっさい言及していない。

ウィテンベルク時代に入ると、叙述は急に詳細になるが、要点をいかつまんで述べると、このルター派正統主義の本山で、彼は、ハレで身につけた敬虔主義を主張しようとしたが、正統主義者たちの予想外の寛容な態度のために対決の機会をうることなく、かえって彼らの公平な考え方に目を開かれて、内心忸怩たる思いをしたという。次いで教養旅行に出かけたオランダとフランスでは、ちがった世界とちがった思想・宗教を知り、ドレスデンの宮廷時代には世俗を知り、世俗の友人たちから自己の空中楼阁的な宗教性を揺ぶられたが、それはむしろ自己の宗教の根柢を深める結果となり、だからこそあの匿名パンフレット『ドイツのソクラテス』によって真理を述べることができたのだという。こうした一連の叙述は、一途な宗教感情と高い自尊心をかね備えた血気さかんな青年貴族がしだいに精神的に成長し実際的な感覚を身につけていく過程を、たしかに読者に思い浮かべさせるが、しかしその過程が同時に、彼が真に謙虚になった過程であろうか。

彼がドレスデンの官職を辞した理由は、「そのうちにメーレンやその他の地方からやってきた私の客たちが、かくれカルヴァン教徒や教会離脱主義者であると聞かされていたので、彼らをその誤った信仰の道から正しい道へ引き戻してやりたいと思ったから⁽⁴⁾」だという。彼が受け入れたのは、事実はずでに述べたように、メーレンの同胞だけではなく、教会離脱主義者も含まれていた。彼がこれらの人々を正しい信仰へ引き戻してやるうと考えたその善意には疑

問の余地はないにしても、しかしこの善意のなかには独善の要素が含まれていないだろうか。その点、ヴェルテンベルク派敬虔主義者エーティンガー Frierich Christoph Oetinger (1702—82) が、「根本英知」を模索して教会離脱主義的傾向をもった人々を訪れて語りあったことと比べて、特徴的である。エーティンガーはのちにツィンツェンドルフに招かれて一時ヘルンフォートに滞在したが、二人は結局は相容れることができなかった。

いずれにせよ、メーレンの同胞たちに対するツィンツェンドルフの善意も見当ちがいであった。彼自身述べるところによれば、たしかに最初のうちは、宮廷からさがって来た彼は、迫害を逃れてきた同胞たちよりも多少の長所をもっていたが、しかし彼らがそれをツィンツェンドルフから学びとってしまうと、今度は彼が同胞たちから学ぶ番になって、たとえば教会の歴史や異端批判の資料を、あの有名なアルノルトの『教会と異端の歴史』 Gottfried Arnold: *Unpartheische Kirchen- und Ketzergeschichte von Anfang des neuen Testaments bis auff das Jahr*

Christi 1688, 1699 や ユーエル・ペイル Pierre Bayle (1647—1706) の書物から知りうるよりも、もっと多く彼らから教えられたという。さらに、同胞教団の運営にたずさわって直接間接に接触する実にかまざまなキリスト教徒たちの生き方、考え方を知って、彼は人間への尊敬を知り、同胞たちに対して、いっそう謙遜になったというのである。

ツィンツェンドルフは同胞教団の運営を自己の天職と心得えて、この「神の英知が、おのずから生じた、しかし互に関連しあった諸状況を通じて私を導き入れたもうた天職」⁽⁸⁾ について回想し、人生の大綱 (Genus) はすでに幼時にみずから選んだが、その種類 (Species) は、もっぱら神の導きに委ねられたと述べる。大綱は神の子となることを意味し、種類は実践活動を意味すると考えられる。彼が指導する同胞教団は基礎が固まると外部への宣教活動に手をのびし始め、ついにはいわゆる新大陸にまで進出していく。筆者はすでに、この北米大陸における彼らの布教活動が世界的観点からいえばヨーロッパ人の帝国主義的植民活動の一翼をになうものであることを指摘した⁽⁹⁾ が、ツィンツェンドルフの天職が神の導きに委ねられたという限りでは、この植民活動もまた神の導きによって行なわれ

たとえ言わなくてはなるまい。しかし、ツインツェンドルフの意識の中には、植民主義というような概念はまったく存在しなかったのである。彼は神聖なる使命感に燃えて、教団の事業のために全財産を投げだし、状況に応じて新しい施設を作る一方で古いものを閉鎖するなどの処置をとったが、そうした際に彼の方針に賛同できずに教団を去っていった同胞も少なくなかったという。そして、さらに言葉を続けて、次のような注目すべき発言をしている。「そういうすべてのことにもかかわらず、私はドイツ内外に無名ではない一族の家長でした。そして私の子供たちがどのような原理を受け入れ守っていくか、知ることができませんでした。なぜならば、神の子たることは、自然のままに伝えられるものではなくて、人間には従属しない新しい創造を前提とすることを、私は知っていたからです」

彼は最後に、親戚や知り合いの貴族たちとの関係にふれて、自分と妻が彼らを大切にしたのは、彼らの権勢におもねったり閥族関係から利益を引きだそうというためではなくて、「彼らの魂が私たちにとって好ましく」、彼らが自分たちを理解してくれたからであるとす。「というのも、無感覚でない人の心は、しばしば神の下男と下女にとって最善の弁護者だからです⁴⁴⁾」という。そしてこの小自叙伝は、「私はこういっわけこの二十四年間、私の謙遜の土台から必要な限りのものを取りだしてきました⁴⁵⁾」という言葉で結ばれている。

神から与えられた天職にひたすら打ちこむ謙遜なる実践的哲学者、これが四十六歳のツインツェンドルフが描く自画像といえることができる。ただここで注意すべきことは、彼がいう謙遜の原語は、*Condscendenz* を用いていることである。神に対する人間の謙虚 (*Demut*) ではなくて、人間同士の関係における謙遜である。今日のドイツ語辞典には、この言葉は見出されないが、十八世紀後半にはゲートルがこの言葉を使用している。それは『修業時代』*Wilhelm Meisters Lehrjahre* 中の『美しき魂の告白』*Bekennnisse einer schönen Seele* すなわちまよりに入ルンフト同胞教団の影響を受けたあの敬虔なる女性の告白の中で使われているが、しかしもはやツインツェンドルフの場合のような積極的な価値をもっていない。場面は女主人公とその叔父との会話である。「こんな話によって私

たちはしだいに打ちとけました。そして私は彼に、そんなに謙遜くせんとんならず、(傍点・筆者) 独りでものをおっしゃるときのようにお話しください、とたのみました⁸⁴⁾」

Condescendenz は、高慢 (Hochmut) が否定されて生じる Demut と質的に同一視することはできない。この言葉が今日なお使用されている英語やフランス語では、これはしばしば慙くせんとん無礼を意味するようである。四十六歳のツインツェンドルフが慙くせんとん無礼な人間であったとは即断できないが、同時にまた、彼がもはや高慢な人間ではなかったと言ふこともできない。

いずれにせよ、彼が『ありのままの省察』において Condescendenz を中心テーマにすえたことは、この自叙伝に、ドイツ敬虔主義の先人たちの、たとえばフランケの自叙伝 *Anfang und Fortgang der Bekehrung A. H. Franckes, von ihm selbst beschrieben* とは、かなり異った性格を与えている。フランケは神の前に自己をひなしくしようとする内面の闘いの苦しみと、その苦闘にうちかつた喜びを率直に告白したが、ツインツェンドルフのこの自叙伝は告白的というよりは、はるかに弁明調である。この弁明的性格は、すでに述べた、世の非難中傷にこたえようという執筆動機から由来するものであろう。

しかしながら、こういう弁明調の反面で、ツインツェンドルフには初期敬虔主義者たちにほとんど見出すことのできなかつた新しいものの方があることも否定できない。それは人生ないしは時代に対する歴史的な把握である。たとえば青年時代の教養旅行において外国の新思想に触れたことが、旧来のタイプの敬虔主義者から「実践的哲学者」へと変容するよすがとなったという意識は、行間から十分に読みとることができるし、さらに、すでに引用した、「私の子供たちがどのような原理を受け入れ守っていくか、知ることができませんでした」という言葉には、時代の移り変りに対する——一種の孤独感すら伴った——自覚を明らかに認めることができよう。こうした点が自叙伝としての『ありのままの省察』を近代的自叙伝へ一歩近づけるのである。

人間同士の直接的あるいは間接的な接触からおのれの教養の資を汲みとる、これは、ゲーテの『詩と真実』*Dichtung und Wahrheit* を代表とする近代的自叙伝が描く人間形成の一典型である。ツィンツェンドルフも人と人との接触を通じて謙遜になった、自己の像を描こうと試みた。しかし、ゲーテとツィンツェンドルフの決定的な相違は、前者に見られる告白の苦渋が後者に欠けていることである。ツィンツェンドルフがたとえばシュトラルズントへ身分を匿して赴き正統信仰証明を手に入れた過程には、ある種のいかがわしさを否定できないが、彼自身はこの自叙伝で、その間の内的事情をいっさい明らかにしていない。そもそも彼の生涯には、その内面的動機が告白さるべくして告白されなかった行動が多すぎるように見える。

ドイツ精神史上最も矛盾に富んだ性格の一人であるツィンツェンドルフが、もし自己に対していっそう厳しい告白者であったならば、われわれはもっともっと深みある自叙伝を彼から受けとったことであろう。

註

- (1) Albrecht Ritschl: *Geschichte des Pietismus*, Bd. 3. Bonn 1886. 二一六ページ参照。
- (2) Sigm. Freud: *Gesammelte Werke*, Bd. 8. London 1955. 一六〇ページ。
- (3) A. Ritschl の前掲書二〇〇ページ以降参照。
- (4) 同書二〇一ページ。
- (5) Marianne Beyer-Fröhlich (ed.): *Pietismus und Rationalismus (Deutsche Literatur in Entwicklungsreihen, Reihe Deutsche Selbstzeugnisse, Bd. 7)*. Leipzig 1933. 三六ページ。
- (6) 同書同ページ。
- (7) 同書同ページ。
- (8) 同書三七七ページ。
- (9) 同書三八八ページ。

ツィンツェンドルフ自画像(伊藤)

- (10) 同書同ページ。
- (11) 同書四七ページ。
- (12) 同書四五ページ。
- (13) 同書四九ページ。
- (14) 同書五〇ページ。
- (15) 拙論『ドイツ敬虔主義と自叙伝』「高橋義孝先生選厝記念論集ゲルマニステイクの諸相」昭和五十年 三五ページ参照。
- (16) M. Beyer-Fröhlich の前掲書五一ページ。
- (17) 同書同ページ。
- (18) Goethes *Werke*, Bd. 7. hrsg. v. F. Trunz. Hamburg 1950. 四〇五ページ。

主 要 参 考 文 献

- August Gottlieb Spangenberg: *Leben des Herrn Nicolaus Ludwig Grafen und Herrn von Zinzendorf und Pottendorf-Barby 1773-1775*. Neudr. Hildesheim 1971.
- Erich Beyreuther: *Nikolaus Ludwig von Zinzendorf in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Reinbek bei Hamburg 1965.
- Ingo Bertolini: *Studien zur Autobiographie des deutschen Pietismus*. Dissertation (Ms) . Wien 1968.
- Friedrich Christoph Oetinger: *Selbstbiographie. Genealogie der realen Gedanken eines Gottesgelehrten*, hrsg. von J. Roessle. Metzingen 1961.

追記 昭和五十一年一〇月一〇日仙台市で開催された日本独文学会秋季研究発表会において口頭発表された『ツィンツェンドルフ自画像』は、本稿を要約したものである。